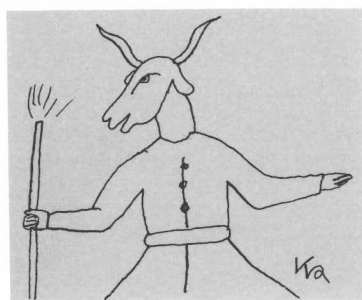


文化祭

文化祭 自選短篇集

結城信一



青娥書房

文化祭

昭和五十二年五月十日 第一刷発行

著者 結城信一

発行者 加清 蘭

発行所 株式会社 青娥書房

東京都千代田区三崎町三一―十一
電話 東京 一六四―二〇二三
郵便番号 一〇一 振替東京九二二四〇〇

印刷 壮光舎印刷株式会社

製本 松栄堂製本

0093-1162-3972

文化祭

目次

椎
林

131

白
い
落
葉

73

夜
の
梅

53

明
滅

35

花
の
ふ
る
日

5

束の間の幻影
153

文化祭
177

山手樗（ぶな）
199

あとがき
221

装幀・画
風間
完

花
の
ふ
る
日

沈みがちな心で、ぶらぶらと散歩をしてゐたある日、家の近くにまで戻つてきて、有田は思ひがけず庭木の上に、小さな花を見た。

眼の高さほどにある黄楊つげの花である。

今日まで何故気づかなかつたのか、と有田は不審だつた。知らぬうちに咲いてゐて、なかばは土の上に、雪片のやうに散りこぼれてゐる。

有田の家は、小路の行詰りにある。

その途中に、黄楊の木の長い生垣があつて、花は其処で咲き、そして散つてゐた。

米粒の半分といふほどの淡黄色のまるい瓣が四つ、慎ましやかに端正に向合つてゐる。覗きこんでみると、黄色の花粉が烟り、をしべ、めしべ、ともに花の底で、どちらがどちらとは見究め難い。妖しげな細微の世界が、仄かな香りを漂はせながら静かに呼吸してゐる風である。

生垣は手入れが行届いてゐて、木の高さも程々のところで、整然とそろつてゐる。花に気づくのが遅かつたのは、こちらの心の状態にもよつただらうが、あまりにも小さい上に、色が派手でもなく、

またみだれることもしないからか、と有田は語りかけて、それから呟いた。

《……自分のアトリエも、この花に、どこか似てはゐるまいか……》

分相應の小造りに徹したつもりであつて、控へ目に、地味の上に更に地味に、また費用も節約して、と終始心がけた。長年の労苦の果に、やうやく叶へられた、ささやかな自分ひとりの城である。

《……似てゐる、とは言つても、しかし木の上で咲いてゐる花か、地の上に落ちてゐる花の方か……》
真剣に呟いてゐると、落ちてゐる方だ、と声がかきこえてきさうである。

《……落ちてゐても、匂ひがあれば、まだ花だ……》

有田は、何かあらぬかたに向つて、挑みたい心境になつた。

黄楊の花に、思ひがけず眼がとまつたのも、失はれかけた調子が少しづつ甦つてきたからだらうか。
若い頃にあつた、あの懐しい弾みといふものが、幾分なりと出てきたせゐだらうか。

《……ひとには、潮どきといふものがある……》

有田は都合のいい解釈を試みた。

……昨年の早春、家とアトリエの新築が、半年以上もかかつて出来たあと、有田は重い疲労から容易に開放されなかつた。全身の骨がむきだしのまま、寒風にさらされてゐる思ひが、寧ろ強くなつた。
恒例の春の展覧会には、二年前の旧作を物置から引張りだして、少しばかり加筆した上で出品したが、それから半年ほどは、ずるずると日が流れて去つた。

仕事が遅い方だから、以前に知りあつた画廊の主人からの個展の勧誘があつても、なかなか実現は

しない。

十五年前に会賞を受けて以来、個展の開催は僅かに二度である。

時間を十分にかけての制作の筈だが、必ずしもそれがうまく奏効してゐるとは限らない。自分自身でさう解釈してゐるほどだから、会の仲間たちからも、凝りすぎて逆に意図が活かされてゐない、軽みが欲しい、風通しをよくせよ、などと言はれたりしたのも当然のことだらう。

暗い、と言はれたことはなかつたが、うつすらと暗い、と表現したのは、最近しばしば来るやうになつた由紀子である。

由紀子が若いためもあつて、この言葉は有田の胸を衝いた。同世代からの発言なら、おそらく聞き流してゐたにちがひない。

夜は画筆をとらぬことにしてゐる。しかし、何となく外に出て行きたい衝動にかられてくる。多分にこれは、ひとり暮らしの侘しさ、と言ふもののやうであつた。

酒は飲めない。

そこで一冊の本か、またはノオトブックを脇に挟んで、さて何処に行つてみるか、となると、落ちついた静かな喫茶店が浮んでくる。それも、珈琲の旨い店の方がいい。椅子も、軀のやすまる、柔いのがいい。

心がけてゐるうちに、やがてさういふ店が見つかった。本を読むのにも、短い原稿の下書をつくるのにも、恰好な店である。

略してC・Gと言つてゐるが、店の正式の名はCOFFEE・GARDENである。

アトリエから歩いて、十二、三分のところにあつた。

テーブルに置かれた厚い板硝子の下に、細長いカードが挿しこまれてある。

「この店はコーヒールームでも、コーヒーショップでもありません。《珈琲の庭》です。珈琲を愛するひとたちの苑です。静かなあたたかい雰囲気のため、心ゆくまで好きな珈琲を探して、おたのしみください。ひとりで、もしくは親しいお友だちと」

十ペーシほどの小冊子型のメニューには、五十種に及ぶ珈琲の名が出てゐる。店主の自信と同時に、気負つた、しかし厭味のない息づかひまでが、これら印刷物からひびいてくる。

二

由紀子が訪ねてくると、有田はC・Gに連れてゆく。

イタリアン・エスプレッソといふ名の珈琲を、由紀子は初めから気に入つて、いまはそれに馴染んでしまつた様子だが、「現代人が欲求する世界の珈琲」とC・Gでは謳つてゐる。有田が常用してゐるのは、モカである。メニューには、アラビア・モカ・マタリとある。

由紀子が訪ねてくるのは、多く気紛れであり、ときとして暇つぶしなのだらう、と有田は思つてゐた。好奇心もあるかも知れない。

有田はアトリエの中には、減多に客をいれない。由紀子も、その例外ではなかつた。

セザンヌが厳しいことを言つてゐて、その言葉に有田は昔から共鳴してきた。

《私は仕事をしてゐるところを、ひとに見られるくらゐ苦しいことはない。ひとの前では、何ひとつ描くことも出来ない……》

由紀子は、有田の学校の後輩になる男の末の妹で、有田とは、二十以上も年齢のひらきがある。家が、有田のところからバスで三停留所先、といふのは偶然であつた。

銀行に勤めてゐると言ふので、どんな仕事なのかと訊くと、

「べつに……」

それが口癖で、その癖は十分経つてから、有田に分つてきた。服装も、いつも殆ど黒であつた。こちらの方は、癖ではなくて、好みなのだらう。黒づくめ、といふときも幾度となくあつた。

はじめて来たときの由紀子は、二十歳になつたばかりのころである。

兄から紹介されたのでもなく、兄と一緒にもなく、由紀子は突然、単独で訪ねてきた。

有田がわけをたづねると、

「べつに……」

絵の勉強をしたい、といふ風にも見えなかつた。

無口な娘なのか、と思つてみたが、さうでもなかつた。二三回来てゐるうちに、無口な娘は逆に饒舌になつてゐた。

何かの話の折に、和服は、と有田が訊いてみると、

「大好きです。それも、やっぱり、黒がいいわ」

有田は由紀子の大きな眼を、ふいと覗きこんで、

「喪服がよく似合ふかも知れないな」

「それを言ひたかつたの。一年中喪服でゐられたら、最高に素敵だと思ふんだけど」

何処かで、何度か耳にしたことがあるやうなことを、晴ればれとした表情で、由紀子はちからをこめて言ふ。

「いくら黒がいちばん好きだからと言つて、一年中、とはねえの……」

「でも私、お花なら白が好きよ」

「白と黒は、ぼくも好きな組合せだ」

「でせうの……私、モデルになりませうか。ヌードでも、平気よ」

有田は茫然としながら、

「映画の中にもそんな女の子、ゐたやうだつたね」

「私のは、違ふの。人真似ぢやないもの。私、いつも、自分自身でありたい、と願つてゐます。いつも……」

由紀子が力むので、有田は何となくをかしくなつた。

冗談まじりに、

「その、自分自身といふのは、つまり、何だらうね？」

「たいへん意地悪な質問だと思ふわ、そんな……」

「さうは思はない。これは、質問ではないよ」

由紀子の眼は、ときをり二重瞼の下で、うるみ加減に大きく耀く。

C・Gへ行かぬうちに、と有田の客間で由紀子は、膝の上で開いた本を、突然声に出して読みだしたりする。

途中でその本を閉じると、うつとりとした顔になつて、

「冬の海を見てゐます」

「冬の海の波を見てゐます」

呪文のやうに呟くのも奇怪だが、更に有田を駭かせる。

「冬の海だ、と有田さんと思ひますよね？」

秋の海の描写だ、と思ひながら有田は聴いてゐたのだ。

小さな草花よりは、大きな樹に咲く花の方が好き、と由紀子は言つた。

そんな話をして、一週間と経たぬうちに、両腕に四五本の白木蓮を抱いて、有田のアトリエに姿を見せた。

開いた花と、半開きの花と、蕾とが、自然の調和をたくみに支へてゐる。由紀子の胸の膨らみの上で、群れてゐる小鳥のやうにも見える。ひとつの小鳥は、肩に止まつてゐる。有田の家には、これまでになかつた華やいだ趣きだつた。

「もらつてきたわ。知合ひの、お家の庭にあつて」

と言つて、

「素敵でしょ？　まるで、お花がよろこんでゐるみたい」

必死になつてゐる気配で、有田はたちろいだ。……文字通り小鳥ならば、腕のなかで押潰され、呼吸をとめてしまふのではあるまいか、と思はれるほどに、強く強く抱きこまれてゐた。

三

有田はC・Gの奥の椅子に腰をおろして、出入口の向うの、柳の並木を眺めてゐる。見えるのは、並木のうちの三本だが、初冬の柳は、まだ緑の葉をつけてゐる。

その柳の葉とおなじ色のゴムの木が、有田の椅子の近くにある。腰かけてゐる有田より、五十センチほどの高さになる鉢植である。

柳の葉と、ゴムの厚ぼつたい葉とを見較べてゐるうちに、有田の気持が次第に不安定になつてくる。柳の方が緑のまま冬を越し、室内で保護されてゐるゴムの方は、やがて枯れてゆくだらう、と有田は奇怪な連想を追ひはじめる。

アラビア・モカ・マタリの表面に、ゴムの葉の影が落ちてゐる。

酸性の強い珈琲だから、生クリームが薄皮のやうに白く浮く。緩かに底の方から掻きまぜてゐると、銀色の匙の細い柄に、緑色がはたるのやうに光る。